

## 教育実習事前・事後指導（夜間部）

### ～教育実習で成功する実践的指導力を備えた学生の育成～

人文学部 教育・臨床心理学科 教授 菊池裕次

#### 1 問題の所在

教育実習事前・事後指導(夜間部)は、40～50歳代の社会人や科目等履修生をはじめ複数の学部の学生が履修している。実習校種は小学校・中学校・高等学校であり、中高の教科・科目は社会科、地歴科、公民科、情報科、商業科、工業科などと多様である。

本学では4年次前期(一部学生は後期)に教育実習が行われている。教員採用試験を目前に控え何かと忙しい時期である。

教育実習は、学校現場での教育実践を通じて、学生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会である。教育実習は、学校現場で行われる授業や学級への関わりなどが中心であり、また、事後指導も、こうした教育実践を通じて明らかになった課題等を省察する機会として位置付けられている。さらに、教育実習やその後の事後指導を通して明らかになった課題を4年次後期の「教職実践演習」で必要に応じて補完的な指導を行うなどの工夫を図ることが必要であるとされている。

このような教職課程の履修の流れを考えると、教育実習における学びの質や課題の把握が学生にとっての進路の転換点の一つの契機になっていることが分かる。以下、教育実習についての課題を整理してみたい。

**課題1** 授業がうまくできず悩む学生が多い。

教科教育法や教育実習事前・事後指導において、学習指導案の書き方については指導があり各自1度は指導案を作成した経験を持っている。しかし、学生によると、「作成した指導案のどこが良くてどこを改善すべきかといった個別の指導をしてほしかった」、「模擬授業が何名かの代表によって行われ、全員が経験することがなかった」という要望や不満の声があった。これは、学習指導案の作成について学生が大きな不安を持っていることを表している。また、よい指導案を作成すれば、授業がうまくできるだろうという「甘い予測」につながっている面もある。

しかし、授業を成立させるためには、指導案のほかに、更に別の大きな要素がある。それは、子供に対する「働きかけ力」である。これは個人の人格的要素やパフォー

マンス力に多少の授業技術を加えたものである。簡単に言うと、子供をひきつける力である。この点に、多くの学生が気づいておらず、また短期間に身につくものではない。教育実習以前に、インターンシップや学校ボランティアなど学校現場に慣れ親しむ活動の豊富な積み重ねが求められる。

**課題2** 実習校と大学の連携が十分ではない。

教育実習においては大学と実習校の協力により、授業案を作成したり、教材研究の指導を行うなど、大学の教員と実習校の教員が連携して指導に当たる機会を積極的に取り入れることが必要であるとされている。(Cf「教職課程の改善・充実について(教職課程の改善・充実に関する協力者グループにおける検討)」)

- (1) 本学においては、実習校が西日本各県にまたがっており実習生数も多いことから、大学教員の実習校訪問は一部の実習校に限られている。一方、実習校や地区校長会等から大学教員が実習生の査定授業に参加し指導してほしいという要望もあり、近隣の実習校では極力査定授業日の訪問に努めるべきである。
- (2) 教科指導の実践は教育実習の最も重要な内容であることから、十分な授業実習の時間数の確保に努めることが必要であることは言うまでもないが、実態としては、査定授業前の授業を3時間しか担当させてもらえなかった事例があった。(7名中2名、高等学校)また、地理の実習を希望していたが、学校側の都合で世界史を担当させられたという事例もあった。

**課題3** 教育実習の評価に関しても課題がある。

- (1) 教育実習の評価については、大学と実習校が連携して適切な評価に努めるべきであるが、現状では実習校の評価に大きく依存している。教育実習簿には指導教員の指導内容や実習生の自己評価や反省など克明な記述があり大いに参考になる。実習校においては、親身になって懇切丁寧な指導をしていただいていることが分かる。
- (2) 査定授業の評価については、実習校の協力を得て実習生の授業のDVDを制作してもらい事後の指導と評

価に活用しようと試みたが、DVDを制作できたのは7名中1名にとどまった。生徒の顔が映ってしまうなど個人情報の取り扱いに危惧がある、また、ビデオカメラなどの機材の手配が必要等の課題があった。このように査定授業の評価についても実習校に依存している状況である。

## 2 教育実習前の実習生の不安と実習後の振り返り

次に、教育実習前に不安を感じ、そのためにある程度準備をして臨んだ事柄が実際の教育実習においてどのような結果に繋がったのかについて考察する。

(1) 教育実習前の実習生の不安なこと、知っておきたいこと (2016年度第1回講義16名)

[授業構想, 教材研究, 授業技術, 査定授業]

授業することが不安, うまく授業をするコツ

教材研究の仕方

専門教科の知識不足をどうすればいいか

時間通りに授業をやるのか心配

板書の仕方, 黒板の字や普通の字が汚いこと

生徒への言葉遣い, 授業中の言葉遣い (普段の話し方

が無意識に出そう)

ワークシートの作り方

発問の工夫, 方法, アドリブ対応力のなさをどうすればいいか

査定授業が心配, どんなものか。

初日は何をするのか, 授業は出来るのか, それ以外の時間は何をするのか

多い人で何時間授業をするのか

だいたい平均でどのくらい睡眠がとれるのか

[生徒理解, 生徒指導面]

生徒との距離感 (どこまで注意, 怒っていいのか)

なめられそうで怖い. (小中で実習生がいびられていた)

男子に対する接し方 (女子高から共学になったので)

生徒指導的なことが出来るのか不安

[他の実習生や先生との人間関係]

浪人しているのでも周りに仲間がないので心配

他の先生方との付き合い方

以上, 実習生が不安を抱く「授業面, 生徒指導面, 人間関係」の3つの要素を, 教育実習終了後の実習生の自己評価結果 (資料1 教育実習の振り返り) と比較検討する。

### 資料1 教育実習の振り返り

#### 教育実習の反省

よくできた ← 5 4 3 2 1 → できなかった

評価項目	5	4	3	2	1	平均値
1. 教材の研究を綿密にしたか		4	3			3.57
2. 指導目標によく適合した指導計画が立てられたか		5	2			3.71
3. 生徒の興味・能力をよくつかみ, 指導計画の中に生かしたか		6	1			3.86
4. 精密正確で要領よく整えられた学習指導案を作ることができたか			7			3
5. 教材・教具を必要かつ十分に準備することができたか	2	4	1			4.14
6. 動機づけがうまくできて, 自然に盛んな学習意欲を起こさせることができたか	2	1	3	1		3.57
7. 活動的で効果的な学習を展開させることができたか	2	1	4			3.71
8. 臨機応変の措置を行って教育効果を上げることができたか		2	4	1		3.14
9. 個人差に応じた指導をすることに努めたか		1	4	2		2.86
10. 言語が明瞭で高低遅速も程よく, 生徒をひきつけることができたか		1	2	3	1	3.43
11. 生徒を適正な方法で評価できたか	1		5	1		3.14
12. 評価の結果をうまく処理し, 次の学習指導に役立てたか	1	1	4	1		3.29
13. 生徒の観察や実態調査の結果を十分研究し, 指導にうまく利用したか		1	6			3.14
14. 生徒の会合に積極的に参加し, 適切な指導をしたか	1	3	1	2		3.43
15. 教室の通風・採光・清掃など, 衛生的環境の配慮につとめたか	3	3	1			4.29
16. 教室内外の整頓と美化につとめたか	2	3	1	1		3.86
17. 帳簿や記録の作成を綿密に行い, その保管に慎重であったか	2	1	3	1		3.43
18. 各種研究会に積極的に参加し, かつ建設的, 協力的であったか	1	2	3	1		3.43
19. 教員や同僚と協力・協調し, 十分好感をもたれたか	3	2	2			4.14
20. 生徒から親しまれ信頼され, しかも尊敬されたか	3	2	1	1		4
21. 総合判定		5	2			3.71

左表のように平均値が低い観点(3.14以下、網掛けの項目)は、9. 個に応じた指導, 4. 指導案作り, 8. 臨機応変の指導の在り方, 11. 適正な評価などである。このように、事前に不安を感じていた教科指導面については、教育実習においても十分に克服できず課題として残ったといえる。

一方で、19. 教員や実習生との人間関係, 20. 生徒指導面については比較的良好であったと認識しているようである。

### 3 課題解決の方途

ここからは教育実習を充実させるための課題, 1 実習生の教科指導力(生徒指導力を含めて)を充実させること 2 大学と実習校および教育委員会との連携を図ることの2点について課題解決の方途について検討する。

(1) 実習生の教科指導力(生徒指導を含めた実践的指導力)を充実させること

このことについては、まずは大学の教職課程の講義方法等の改善が必要である。「教えること」と「学ばせること」の区別という考え方は小中学校では自明のこととして捉えられている。これを大学の教職課程において考えると、「教えること」とは座学的な知識・技能の習得であり、「学ばせること」とは、能動的・主体的な学び(アクティブ・ラーニング)であり実践的指導力の獲得である。学習指導案の作成は当然のこととして、多様な児童生徒からなる教室で、「どのように働きかけどのように子供を動かしていくのか」という集団を動かしつつ個に目を配る実践的な感覚、指導技術を身に付けることが極めて重要である。

学生にとって教職課程の講義が受け身で聞いておけばよい程度に捉えられているとすれば実践的指導力は身につかない。講義の時間の多くを割いて「なすことによって学ぶ」能動的・主体的な学びを用意すべきである。そのためには、大講義室での講義ではなく、40人を上限とした編成に転換し、学生に汗をかかせる実践的内容を充実すべきと考える。

また、学生の対人能力不足、社会常識の不足や視野の狭さ、学校組織運営についての無理解なども授業がうまく出来ない要因になっている。教育実習以前に、幅広い社会体験、インターンシップや学校ボランティアなど学校現場に慣れ親しむ活動等の豊富な積み重ねが求められる。

(2) 大学と実習校および教育委員会との連携を図ること

大学と実習校の連携については、1の「課題2」で触れたところであるが、大学と実習校および教育委員会との連携については、とりわけ大学と教育委員会との連携を推進すべきである。本学でいえば、地元福岡市教育委員会との連携を一層図るべきである。

学校インターンシップについては一律の義務化は見送られたようであるが、類似の活動として福岡市には「学校サポーター制度」が定着している。これは、日本の特色ある実習制度およびそれに類する取組として一定の評価を受けている。本学の学生も多数学校サポーターとして活動している。この制度の課題としては、

○学生が派遣されていない学校に対するアプローチ(交通の便が良い都心部の学校に多く派遣されている。交通費や謝金は支給しない制度である。)

○遠隔地や特別支援学級を希望する学生が少ないことへの対応

○アジア圏からの留学生の積極的な活用(福岡市は、アジア圏からの留学生が多い。子供に多様な価値観に触れてほしいという学校も多いため、留学生の積極的な活用が求められている。)等があげられている。

(cf「平成26年度文部科学省“総合的な教師力向上のための調査研究事業”報告書 テーマ:教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発 長期教育実習と実習フォロー研修の試行と効果検証:実践的指導力養成に向けて」九州大学)

本学が福岡市教育委員会と連携して、学生が学校現場に慣れ親しむ体験活動の貴重な機会を提供している学校サポーター制度の更なる改善を図るべきである。

次に、教育実習については、問題点とあげた事例(査定授業前の授業を3時間しか担当させてもらえなかった事例、地理の実習を希望していたが学校側の都合で世界史を担当させられたという事例)は福岡市立高校でのことである。現場教員には「教育実習迷惑論」的な考えがあるのは事実であるし、現実に指導教員の負担も大きい。スムーズな教育実習が行われるようにするためにも、実習校や教育委員会との連携を推進すべきである。

#### 参考資料

以下の資料2及び資料3は、2015年度教育実習生(7名)の教育実習簿から抜粋した苦闘の記録、反省・感想である。

#### 資料2 教育実習で困ったことや苦しかったこと、悩んだこと

[指導案, 授業方法, 時間配分, 話し方など]

○大学で模擬授業は説明型の授業だったので、「発問から課題発見へ、そして解決へと生徒自らができるようにサポートするという授業」は最初難しかった。

○指導案がなかなかまとまらず苦労した。

○指導案の書き方が担当教員によって全然違うのが興味深かった。

○授業が本当に苦しかった。(高校世界史A)教科書や資料集だけでは限界があったので、参考書を購入し教材研究をした。指導案書きにも苦労した。「知識ばかり教える授業だと生徒は50分間もたない。生徒も参加

できる授業を計画してみて」と指導を受け、発問を多く取り入れた授業計画を立ててやってみた。実際にやってみると発問の意味が分からず沈黙の時間が続いた。改善できたのは板書の仕方や声の大きさぐらいで授業の内容は思うようには出来なかった。

- 教材研究と授業展開が苦しかった。教材研究は教科書を熟読することはもちろん他にも用語を完璧に理解し、それをどのように教えれば生徒が一番理解することができるか、自分なりのアレンジを加えなければならなかった。
- 授業展開では前時の授業と本時の授業を密接につなげていくことが大変だった。自分では出来ているつもりでも、担当の先生から「つながりがない、分かりづらい」と指摘された。
- 授業での問いかけに生徒が反応してくれなかったり、思っていることが伝わらなかったりした。
- 授業を生徒に理解してもらえなかった。授業に慣れてきた頃、授業の途中で生徒が寝てしまったり、協同学習(グループ学習)で分かっている生徒が少なすぎることに焦りを感じた。いかにして生徒の理解度を確認しながら授業を進めていくか悩んだ。
- 査定授業前の3回の授業のうち2回は、授業が20分早く終わってしまった。3回目は授業中どんなことをするのか、流れを書き、更に自分が言うことを細かく書いた台本も作った。その結果、しっかり時間配分ができた。しかし、査定授業のときは緊張が高まりやりたいことが全然できずに終わった。
- 時間配分がうまくいかなかったり、準備していたことが出来なかったりした。
- 「声にメリハリがない」と指摘された。どのようにメリハリをつけたらよいか分からず困った。なかなか声に強弱をつけることが出来ず間延びした授業になってしまった。
- 普段人前で話すことに慣れていないため緊張で上がってしまった。大学で模擬授業をしたことがあったが、緊張感が全く違う。前日教材研究したところも吹っ飛んでしまい、頭が真っ白になり自分で何を言っているかわからずに授業を終えてしまった。後で、生徒から「右手が凄く震えていましたよ」と言われた。
- 実習当初、精神的に多少疲れたが、指導の先生の「実習は楽しむぐらいがよい」との言葉で楽に過ごせた。  
[生徒理解、生徒指導、生徒との距離感、コミュニケーション]
- 指導しなくてはならない範囲、また、許してよい範囲の線引きが難しく、先生によっても範囲がまちまちなこともあって、戸惑った。(中学校)
- 生徒はたくさん話しかけてくれ、相談に乗ったりして打ち解けることができたが、プライベートな相談にはどこまで言っていかわからず、生徒との距離感は難

しいと感じた。(高校)

- 私は、人とのコミュニケーションをとることが基本的に苦手。実習中は生徒とのコンタクトを何度も試みたがうまくいかなかった。しかし、少しずつコミュニケーションが取れるようになったと思う。
- 授業外で生徒がふざけていることに対し注意するかどうか迷った。  
[身だしなみ、化粧]
- 初日、私は化粧をして登校した。その時、先生に「社会人の女性としての身だしなみ」と「教員として生徒のモデルになるような身だしなみ」の見方があると言っていた。このことから、実習生としてどんな時も見られているという意識を持ち、言動一つ一つに気をつけた。

### 資料3 実習を通して学んだこと、分かったこと、身についたこと

[指導案、授業方法、時間配分、話し方など]

- 教材研究の大切さ。実習で痛感したのが自分の知識の浅さだった。教科書だけを教えるのでは生徒の好奇心を満たすのに足らず教科書から派生することまでを網羅した知識が必要だと感じた。難しくなりがちな社会科学の用語を生徒に分かりやすく伝えられるかが課題。
- 教材研究と授業の質  
教材研究に関しては自分の得意な科目だけ知っていてもいけないことを痛感した。私は地理を専門としていたが、実習では「世界史A」を担当することになり、自分の知識の少なさに悲しくなった。「地歴科」なので歴史もしっかり勉強しておかなければならないと思った。
- 授業では、生徒のどのように考えさせ、感じさせそこからどう発問するのかという考え方を重視すべきだと思った。
- 面白味のある授業をするために、どこまで話をするかなど奥深い知識を研究すべきだと思った。
- 教師の仕事は、授業だけではなく放課後に個人指導をしたり、各委員会の仕事、部活動や役職の仕事、研究授業など分刻みに働いていて、学生時代には気がつかなかったことが多く驚いた。
- 「教師は誰かに教えてもらうことはない。他の先生に授業を見て学び、自分にあったスタイルを確立させることだ。」(指導の先生の言葉)と言うことを学んだ。生徒の理解度を確認しながら(生徒に答えさせたり、話し合いさせたりする。)進めることがうまい先生や、教材研究が豊富でエピソードを交え独特な話し方で生徒をひきつける先生などが勉強になった。
- 教師としての立場の責任と難しさを学んだ。教師は生徒に大きな影響を与える、人の人生を大きく左右させるような存在であること。また、生徒に教えることの難しさを学んだ。

- 板書の仕方も工夫することで、生徒の集中力も変わっていくことが分かったので、気をつけて行きたい。
  - 教材研究は生徒のためだけでなく、教師としての質を向上させることにも繋がってくると考える。解説や説明を行うとき分かりやすく教えることが出来るようになり、生徒の理解の向上に繋がってくると思う。
  - 生徒が躓きそうなポイントを予測し、最大限の援助と教材研究をすること。実習の授業で、当たり前知っていることと思ってさらっと流したところが生徒全員理解していなくてそのまま進んでしまったため授業が壊れてしまったことがあった。2の0乗の概念のところ、2掛け0で0という理解をしている生徒がほとんどだった。私も正直なところ暗記していて、教材研究不足を痛感させられた。…
  - 一コマの授業を行うだけでも相当な準備が必要になります。生徒の興味関心を引くためには専門教科の深九手幅広い理解と時事問題を始め様々な情報を得るアンテナを張る必要があると感じた。
  - 時間配分をうまく組み立てること、声にメリハリをつけて授業をすること、資料の使い方などを工夫して授業の準備をすることが必要と感じた。
- [生徒理解、生徒指導、生徒との距離感、コミュニケーション]
- 挨拶することの大切さを学んだ。校門でのあいさつ運動に参加し、元気に「おはようございます」と返事が返ってくると、とても嬉しかった。廊下ですれ違う時も「こんにちは」とあいさつしてくれて、私も○○高校の一員だなという実感が持てた。一言で人を元気にしたり、優しくしてくれたりするあいさつは本当に大切だと思った。
  - 生徒は環境や高校の違いにより多少のパフォーマンスの違いはあるが、その子なりに真剣に考え、優しさや礼儀正しさが備わっていることが分かった。生徒理解が少し出来るようになった。
  - 礼儀については、言葉遣いをきちんとしないといけないことを学んだ。そうしないと教師同士の連携もうまく出来ないし、何よりも生徒に示しがつかないことが分かった。
  - 理想と現実のギャップを知ることができた。発達段階の途中の中学生にはしつけ的な指導も必要であることだ。本来は家庭の役割ですが、現実には学校の役割が大きくなっている。大学では生徒の人格と言った点を多く学ぶが、「しつけ」といった教育は論理的な指導

や言い諭す指導では生徒の心に響かないと感じた。現場では厳しい指導で短時間に指導する先生が多く(現実には時間の制約もあり仕方ないと思うが)本当の心に響く指導は出来ないと感じた。教師にゆとりが必要だと分かった。

- まず、生徒理解。この生徒理解なくして教育は成り立たない。生徒の立場になって考え、性格や心を知るようになること。そのためには生徒との関係作りのため、生徒の心理(心理学)の勉強が大事だと思った。
- また、生徒理解から生徒指導へつなげる学びが更に重要であると思った。
- 生徒理解に関しては、心理学等でデータの的に生徒のことを理解していかなければならないと思う。一人一人の個性が違うため、多少の違いはあるが、問題が起きたときにある程度対応できると思うし、また、豊かな人間性を養うことにも努めていかねばならないと思った。

[教員の仕事の範囲、量、多忙感]

- 教師の仕事の大変さを学んだ。授業以外にもホームルームやあいさつ運動、テストや課題の作成などの仕事がある。定期考査では、問題のチェックや遅くまで残ってテストの採点など常に動きまわっている姿を見ました。(今まで知らなかった。)朝の10分の職員朝礼では、教頭先生や学年主任の話のほかクラス単位の連絡事項等をメモし、それをホームルームで伝えるのだが、「生徒の集中力を持続させるにはただ伝えるだけではだめ。内容を自分自身で確認して、話す順序を考えて話してください。」とご指導をいただいた。
- 中学校での激務が分かった。クレーム対応、事務仕事、部活などでのサービス残業的な長時間労働には驚きました。(民間にもあるでしょうが)実態に見合っていない待遇での労働は、教師のモチベーション低下の要因となり、結果、不祥事や教育の質の低下につながっているのではないかと考察した。
- 授業を作り実践することの大切さや人をまとめることの大変さが分かった。
- 先生の仕事は授業をすることだけではないことが再認識できた。
- 正しい言葉の遣い方。敬語の使い方や、訛りや方言の入っていない話し方などは、生徒の見本となり、人の前に立つ教師(人間)として必要な知識だと感じた。

## 参考文献

- 教育実習簿 福岡大学  
若い教師のための教育実践の手引（平成27年度版）  
福岡県教育委員会  
平成24年度中学校基底教育計画 福岡市教育委員会  
生徒指導提要 文部科学省  
私たちの道徳（中学校） 文部科学省  
教育実習完璧ガイド 宮崎猛 小泉博明 小学館  
教育実習生のための学習指導案作成教本  
社会・地歴・公民科 教育実習を考える会  
中学校学習指導要領 文部科学省  
中学校学習指導要領解説 社会科編 文部科学省